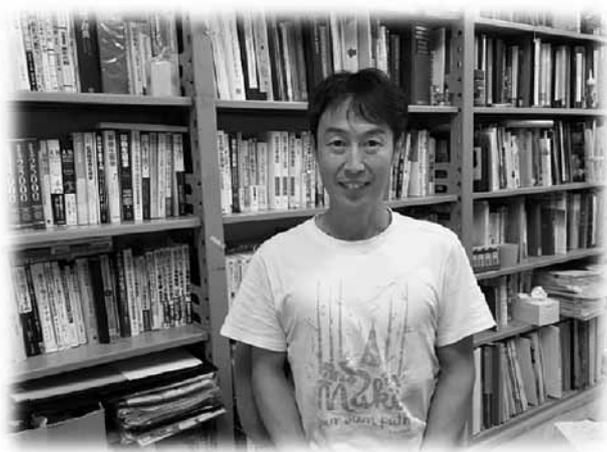


山田 俊弘 先生



研究分野：

生物学、基礎生物学、生物多様性・分類

Q. 今されている研究を教えてください。

ミャンマーの里山で森林保全の研究をしています。私の研究地では、ア

スファルト舗装された道に近いほど

森林が守られていて、奥に行けば行くほど劣化が進んでいました。森林劣化を進めていたのは村人だったので、村人は幹線道路に近いと、他の村人の目を気にして森を荒らしません。しかし、奥の方では監視の目を盗みやすくなり、森を荒らしたりしていたのです。幹線道路があることで守られている森林もあることが分かりました。村人たちに森林を荒らさないように頼むにしても、彼らは木を切らないと生きていけないので、「木を全く切らないで」とは言えないんです。そこで、村人たちが自主的にルールを作って、木材を使いながら、森林が守れるようにするにはどうしたら良いのかを考えています。

Q. 先生が行われている種生物学の講義は保全生物学とどのようなかわり

があるのですか？

種生物学では、進化の仕組みの話をしています。そして、あまり生き物の保全の話には深入りはしないのです。さて、生き物を保全するとはどういうことでしょうか？地球に生命が誕生してから38億年が経ったといわれています。当然、私たちが持っているDNA・遺伝情報には、38億年の進化の歴史が入っていることとなります。例えば僕たちヒトが絶滅します。すると、ヒトの持つ38億年の進化の歴史がそこで消えるということになります。つまり、僕たちが子孫を残しているということは、38億年の進化の歴史を次の世代に渡しているということになり、進化的にもすごく大切なことなのです。

私たちには、子孫を残したという気持ちがいっぱいありますね。他のどの

生き物もたぶん、この気持ちを持って
いることでしょう。それぞれの種が、
38億年の独自の、かけがえのない進化
の歴史を背負っていると考えたら
ば、それを残せるような環境をつくっ
てあげるということは正しいことな
のだと思います。こういう考えを身に
付けてもらって、生物を保全すること
に繋げてもらいたいです。

生物を保全しようという話になっ
たときに、兎角、「生き物が私たちの役
に立っていますよ」という視点で考え
がちです。しかし、この考えではたぶ
ん、生物の保全には限界が来るのです
よ。この考えではもしかすると、「僕ら
のためなら他の生き物が絶滅しても
いいじゃないか」という極端な考えに
なってしまうかもしれないのです。そ
うならないためにも、(僕らのために
もなるのだけでも)彼らは彼らなりに
生き続けたらいいという気持ちがあっ

て、それを尊重してやるっていうのが
正義だぞ、という考えを身に付けても
らうことが大切です。私の中では、こ
うした気持ちを育ませるための講義
が、種生物学なのです。

**Q. どうしてミャンマーの森林を研究し
ようと思ったのですか？**

ミャンマーは世界でもかなり高い
森林減少率を持つ国なのです。ミヤ
ンマーでは森林減少が起こっている
最中だから、その現状を見ることのほ
うが、森林減少が終わって、森が無く
なってしまった所を見るより、大切だ
と思ったのです。きっと、減少してい
る所だからこそできることがあるだ
ろうし、手遅れになる前に何かしたい
と思いい、ミャンマーに行きました。

**Q. 海外で研究をされるときに、現地の
人の協力が必要だと思えますが、どの**

**ように現地の人との繋がりをつくってい
るのですか？**

最初が難しいのですよ。最初の出会
いにはいろいろなやり方があって、と
りあえず行つて、向こうを転々として
いるうちに、自分と同じような考えを
している〇〇大学の〇〇先生ってい
う人がいるという情報を掴んで、共同
研究させてもらうというのもありま
す。しかし、このやり方だと見つから
ないときもありますし、たとえ見つか
ったとしても時間もかかりますから、
時間の制限があるときは、分野は違つ
ても、同じ国について既に研究したり
繋がりを持っている日本にいる先生
に、人を紹介してもらったりしていま
す。

**Q. 海外で活動していて言語で苦労した
ことはありますか？**

基本ミャンマー語は使わないので

すよ。英語で話して、現地の通訳の人にミャンマー語に直してもらって会話しています。この方法だと細かいところが伝わらないこともあるけど、まあどうにか(笑)。自然を観察するときには言葉の問題ないけど、聞き取り調査をしたりするときは不便ですね。明らかに通訳の人が、現地の人の気持ちを付度しているときとかがありますからね。まあそのあたりは、しっかり聞く、何度も聞くことで対応しています。

Q. 英語はやっぱり大事ですか？

どこでも通じる言葉としてとても大切ですね(笑)。言語は勉強するのがめんどろくさいだけで、勉強さえすれば必ず身に付くものです。めんどろくさがらずに、英語の勉強をしましょうね。

Q. 海外で活動するにあたって、心に留

めておくべきことは何かありますか？

渡航前に計画していたことが、うまくそれ通りになることはまずありません。でも、だからといって、そこで消極的になる必要は無いのです。そうではなく、何ができるのかをもう一度練り直すことが大切だと思います。最初の計画にこだわりすぎないこと、失敗しても途方に暮れないこと、どこに行っても人間関係を大切にすることが大切なことです。そして、ちよつとした成功でも「成功体験」として捉えて、モチベーションをあげていくことも、めげないために大切だと思います。

Q. 研究活動をしていて良かったと感じることはありますか？

全部ですね(笑)。例えば、現地でたくさん会話したりして知らなかったことがたくさん知れることかな。あとは、全然知らない人から連絡をもらって

一緒に研究してみませんか？って声をかけてもらったり、海外の学会に呼んでもらったり。そういう風に輪が広がっていることもうれしいことです。

Q. 逆に、研究活動で厳しいと感じることは何かありますか？

海外で活動するときには家族を日本に残していくから、その間、家のことは全部家族に押し付けてしまっています。それは本当に申し訳なく思います。

Q. 学生時代にやっておいて良かったと思うことはありますか？

総科的じゃないのだけどね、好きな教科をたくさん勉強していたかな。アルバイトに重点を置きすぎないようにして、できるだけ、自分の好きなことに自分の時間を使っていたことが良かったことかなと思っています。

Q. 総合科学部の学生に一言お願いします

英語とか外国語は、やりやあ伸びるから必ずやりんさい。そしてやめなさんな。

理系文系関係なく、自分のやりたいことができる総科のとってもすてきな環境を満喫してほしいです。他の大
学や学部では成し得ないことを総科の学生はできるのだから、総科の強みをしっかり理解して、弱くなりがちな専門性については、興味のある分野を究めることで対応しつつ、幅広くいろんな知識を身に付けてほしいです。

2018年度から、IGSという新しい学科が総合科学部に作られます。私は、そちらの教員となる予定です。IGSでは、留学生と共に、日本人の学生も英語で勉強を進めていきます。IGSが総合科学部にできることで、総合科学科の皆さんも英語を話す機会が増えるはずですよ。

「国際」も身近に感じられるはずですよ。IGSは、新しい総合科学部の強みになりますから、この環境をうまく利用して、新しい総科を作っていきましょう！新しい総科を満喫しましょう！楽しみにしておいてください！

あ、あと広島弁をうまく使えるようになっておくと、ぶちええと思うんですよ。

インタビュー担当

鈴木香苗、難波楓、山本昌奈実

★今回インタビューに答えてくださった山田先生が「夢ナビライブ2017」の中で大阪の高校生を対象に行った講義の映像を紹介してくださいました。左のQRコードからぜひご覧ください！



飯間 信 先生



研究分野：

流体力学、数物系科学、物理学、数理物理・物性基礎

Q. 先生がされている研究について教えてください。

研究分野は流体力学という分野で、水や空気など形の無いものの動きを扱う学問です。流体力学の対象は幅広く、天気の変り変わりなどを扱う気

象学も大気の運動なので流体力学のある種の応用分野と考えることができますし、他に、飛行機は翼の周りの空気の流れを使って飛んでいるので航空工学なども、流体力学の応用分野の一つと考えられます。そう考えると、すぐたくさん応用分野があって、氣象学や航空・機械工学などの元になるような学問の一つが流体力学だと思ってもらうと分かりやすいかなと思います。私は、大学院は理学部の数理分子生命理学専攻というところに所属していますが、流体力学を他の分野、例えば生物の運動などと結びつけ、数理科学、数学的なものの見方を応用してその問題にアプローチするという立場で研究しています。

Q. 生物と流体力学は離れた学問のように思いますが、それらをどういう風に結びつけるのですか？

生物と流体力学を結びつけた研究として、例えばミドリムシという微生物についての研究をしています。なかでもこのミドリムシの集団に光を当てたときにできる特徴的なパターン形成のメカニズムに興味があります。生物学的には、ミドリムシが生き残るために意味があるとか、そういう説明になると思うんですけど、流体力学の立場では、流体運動を数理的に解析すると、こういうことが起こるので、こういうパターンができるというような説明の仕方になるんですね。言い換えると、ミドリムシ一匹一匹に注目するのではなくて、集団を連続的な場として見て、その運動を数的に表して解析するということをしています。そうやって再現できたパターンが生き物として必要なものかどうかということ、次の段階の話になるんですけど、数理科学と言うと、紙とペンだけで数

式を作ったというように、浮かべるかもしれないが、私の実験室では実際にミドリムシを使って実験をして、そこからミドリムシの集団運動の数学モデルを作って流体運動と結びつけて解析しています。生物は、一見、数学とはあまり関係なさそうに思えますが、その運動に焦点を当てて、数学的な見方で解析をするというのが私の主な研究のやり方ですね。

Q. いっしょにして、今されている研究をしようと思つたようになったのですか？

私に通っていた大学では4年生になるときに研究室が大体決まって、大学院に入学して本格的にするみたいな感じだったんですけど私の場合は大学院でも同じ研究室にそのまま4年生から所属していたんですね。その時に流体力学、ちよつとおもしろそうだなと思つてやることにしたんです

けどそれが意外と続いて、今では飯のタネにもなっているし、そういう意味では続けていて良かったと思つています（笑）。

実は当時、流体力学をすることに關して、あまり深く考えて決めたわけではないんです。直感に近い感じ。理系の人間がこんなこと言っちゃいけないだろうけど、何かで割り切れるっていうのもなかなか無いし、将来どうなるかも分からない。こういうのが今流っているからいいだろうと思つて決めてしまうと後で理由が無くなつたときに根拠がなくなっちゃうから、何となくいいなと思つたとかピンときたみたいなの、周りの状況が変わつてもあまりそれとは関係ない、自分の判断基準で決めました。自分の興味がなくならちゃうと終わりだけど興味がある限りは多少状況が良くななくても続けようという気になる。自分の中で

の、「説明できないけどこれがどうもおもしろいんじゃないか」という直感みたいな感覚は意外と何事によらず大事なんじゃないかなと思いますね。もちろん、判断するときその感覚が間違っていたら、どんどんおかしなことになっていくかもしれないので、その感覚も時々振り返ったりして磨いていく必要はあるかなと思います。

Q. 海外の研究発表会などにも参加されるのですか？

私はもちろんだし、学生さんでも修士くらいの学生さんなら、英語での発表をしている人も何人もいますね。今、M2の学生さんは英語苦手だからつてすごく苦労して発表していたけど、結果的には評判良かったんですね。ポスター賞みたいなのもらっちゃつて、僕もこんなのもらつたことないよというように豪華な副賞をたくさん

もらっていましたね(笑)。

理系では外国の方と共同研究したり英語の文献を読むっていうのは当たり前なんですよね。けど、総科の特に理系で入ってきた学生さんは、英語が苦手っていう人多いですよね。そんな人でも必要に迫られると意外と大丈夫なんです(笑)。研究の中で、英語で書かれた論文を読むのは、勉強としての英語とまた違うと思うんですよね。自分が興味をもっているいろいろ考えてきたことに関係していることが書かれているので。あと、発表では英語の表現じゃなくて、中身が大事なので、中身が分かればいいんですよね。さっき言った学生さんは、正直話す方はよくなかったんですけど、コミュニケーション力や表現力はすごくある子だったので、そういった面で上手く工夫して、補っていたように思います。賞をもらっているということは、言っ

いることが伝わって、かつ、それが他の人に比べて良かったっていうことでしょうし、やっぱり研究内容を伝えるんだという自分の意志みたいなものが大切なんじゃないかなと思います。

英語だけじゃなくても、部活や趣味でも、何かに一生懸命に取り組むと、頑張ることを知れるので強くなれると思うんです。皆さんは受験のときに一生懸命に勉強されてきたと思うので、頑張ることを知っていますよね。だから、何事も自分の意志次第でどうにでもできると思いますよ。

Q. 研究は何かを最終目標にして行われているのですか？

研究には、一般的にはゴールはいろいろあります。最近では産学協同と言って、要するに会社として製品を作って売ること为目标にするなどがあり

ます。それはすごく分かりやすいのですが、私の場合は、もちろんそこまで行けばいいけど、どちらかというともっと基本的なところでちゃんと分かりたいという意思が強いですね。私が所属している理学研究科では、応用してすぐに役立てるというよりは、今まで見過ごされていてまだよく分かっていないことをちゃんと理解したいというタイプの人が多いです。そのようなことを積み重ねることで、長い目で見ると、人類の発展に寄与するような発明とか工業製品に繋がっていくのではないかと思っています。だから、自分なりにちゃんと理解して、「私はこの現象はこういうふうに思いますがよ」ということを伝えていきたい。それが最終目標と言ったら分かりやすいでしょうか。

Q. 理学部などではなく、総合科学部

で先生がされているような流体力学や
数理学の勉強や研究をすることにつ
いて、どう思われていますか？

総合科学部の場合は文理融合で皆
が同じプログラムで学ぶので、異分野
の人達が一緒に研究して新しいもの
を生み出すことを喜ぶ、そういうこと
をより進めていこうという雰囲気か
ある学部だと思っています。総合科学
部は、文系の人も理系の人も同じ土俵
で学んで、その中で自分なりのものを
作り上げるところだと思っんです。そ
ういうところで研究していると、もっ
と広い視点で何か新しいことができ
るかもしれないので、総科で流体力学
や数理学を勉強することには十分
意味があると思っています。

**Q. 数理学のおもしろさや魅力って
何ですか？**

数理学は、定理の証明や誰かの理

論とかがすごくはつきりしていて、見
れば分かるという分かりやすさがあ
ると思うんですね。数理学をして
いる人は、ある事に関して、よく考え
てみると分からないからそこをもつ
と追求したいなあというような思い
を持った人が多いと思うんですね。
だからやっぱ、ひとつのことをどん
どん深掘りしていくところにおもし
ろさがあるのではないかと思います。
同時に、何事も、ある程度やってみな
いと本当のおもしろさが分からない
ということも知っておいてほしいと
思います。

あと、理系の場合はどうしても数式
を使うことになるので、それがこの分
野の言語みたいなものなんですよ。
文系の場合は日本語だったり英語だ
ったりというような言語を使って、そ
のうえで何かをするということが多
いと思うんですけど、理系は数式を使

って何かをすることがわりと多くて、
それで分かったことを最後に言葉で
説明して納得してもらうので、そのツ
ールである数式はある程度使えるよ
うになつていたほうがいいですね。日
本語や英語でも、言葉を知らないと言
現できる内容が限られてきてしま
ますよね。それでも言えることはあ
らうけど。いろいろ言葉や表現の仕
方を知っていた方が、有利だと思いま
す。

この他、総科の学生さんということ
で言うと、総科は文理融合を謳ってい
るけど、実際に文系と理系というこ
ろまで融合して何かをするっていう
のは意外とされてないような気がす
るんですね。文系の中の近い分野、
理系の中の近い分野での融合はたく
さんされているように思うけど。あえ
てそれをチャレンジしてみるってい
うのもおもしろそうだなという気も

します。そういうのは大変かもしれない。けど、自分の考えがある程度しっかりしていて、受け入れの先生にもそれを理解してもらって、そういうことができそうだなってなったら、そういうのもおもしろいのかなって思いますが。世の中ってチャレンジの積み重ねで何かを成し遂げていくという部分もありますから。

Q. 先生は学生時代をどのように過ごされたのですか？

学生時代は今よりのんびりしていたんじゃないかなと思います。今の学生さんは勉強やアルバイトで忙しくしていると思うんですけど、私が大学生だったときは今よりもうちよつとのんびりしていて、アルバイトも、たまにお金が足りなくなつた時に単発でアルバイトをするといった感じでした。だからどつちかという時間が

たっぷりある感じで、本を読んだりとか、友達と遊びに行ったりもするんだけど色々と考え事をするのが多かったような気がしますね。それも今思えばいろんなことに間接的に役に立っているんじゃないかなと思います。いろいろと、ああでもない、こうでもないとか考えるのが当時から好きだったので、ものを考える習慣や先ほどお話した直感みたいなものが身についたのかもしれないです。あとは、仲のいい友達何人かでするんで、例えばテニスがそのとき流行つたらテニスをやってみたり、冬になったらスキーに行ったりとか、そんな感じですね。だから何か一つ決めてするよりはみんなでワイワイといろんなことをするといった感じでした。あとは、やっぱり数学パズルみたいなものが好きな友達が多かったからこんな問題があるんだけどどうだ、みたいな感

じで、みんな考えて解いていましたね。そんなに難しいものじゃなくて、おもしろパズルみたいな、気軽にできるものをよくして楽しんでいました。

Q. 総科の学生に一言お願いします。

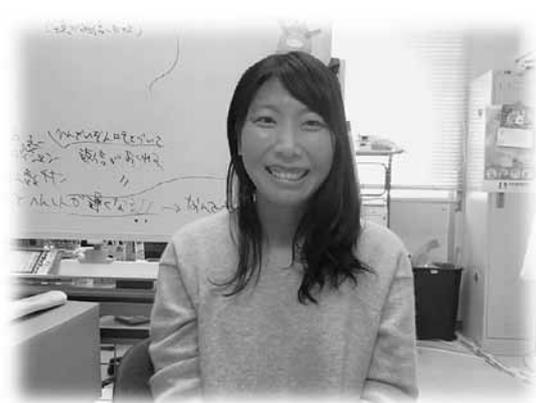
今の学生さんはすごく頑張っていますよね。もちろん勉強も大事だけど、今しかできない、大学生らしいことをもつとしてほしいですね。友達とワイワイ騒ぐとかも大学生でしかできないだろうし。総科生に限って言えば、せっかく文系と理系が同じ学部に交ざっているので、分野の離れた知り合いや友達も作っておいたら、将来、何かに生きてくると思いますね。考えが違ふ人の方が刺激を受けるといふ面もあると思うし、他学部では得られない財産になると思います。総科にいると、幅広くていろんな考えを持った人と出会えると思うんですよね。飛翔も

異分野の人と一緒に何か作業をする
一つの場になっているんじゃないで
すか？そういう機会を大切にしてほ
しいなと思います。

インタビュー担当

29 生 久芳和己、山本昌奈実

小宮 あすか 先生



研究分野：
社会心理学、文化心理学

Q. 先生の研究内容について教えてください。

私の専門は、文化心理学とか社会心理学とか呼ばれる領域です。一番大きいところから言うと社会環境とか、環境に適応して心がつくられる、心のく

せがつくられるところを明らかにしたいこうという分野ですね。

Q. なぜそのような研究をしようと思ったのですか？

なんででしょうね（笑）。学部の3年生くらいの時から研究者になりたいなとは思っていて、そのまま大学院に進んだんですけど、その時大学院に、たまたま短期的に滞在していた研究者がいたんです。その研究者の方が、文化や社会環境の心に対する影響みたいなことをずっとやってきていた研究者で、面白そうだなと思ってそういう研究を進めているっていう感じですね。

Q. 具体的に、こんな感じのことが心理的につくられたというのを教えてもらえますか？

枠と線をつなぐっていう実験を例

にとってみてみると、全然社会とか関係なくて、ただのものの見方の話なんですけど、実はこれが文化によってパフォーマンスが違うという話があった。例えば、日本みたいに他の人との関係を大事にしている、空気を読むとか、文脈情報とか、その状況の雰囲気を読まなくてはならないみたいな文化だと、周りを一生懸命とらえるような相対的な課題の方が得意。逆に、アメリカ人みたいに自分がいちばん！みたいな人たちは絶対的な課題の方が得意で誤差が小さくなるという研究結果が出ています。そういう文化とか社会環境が、ものの見方、もっと広く言うところのくせとか人間関係のつくり方に影響しています。

Q. 数学や生物に比べて、心理ってふわっとしているなと思うんですけど、そこを追求する面白さについて教えてください

れ。

一つは歴史が浅いんですよ、心理学って。哲学から分かれてきたことがあって19世紀とか、その後期ぐらいからの学問であるというところですね。もう一つは、心はやはり見えないので、いまいち何が起こっているのかよくわからないということ。なので、理論が結構ふわっとしているというのはあります。ただ、最近は脳科学とも一緒にやっけてきているのでそれなりに生物学的な基盤と一緒に研究を進めてきてたりとかはしていますね。

Q. 脳科学が発達していても、例えば夢を見るのはなぜかというのはわかっていないですよ。だから、証明しようもないのではないかと思つて。心理学において、仮説を立てるのかなり大変だなと思つたのですけど。

そうですね…まあ一対一対応って

いうわけでもない。推測するしかないっていう部分はありますよね。でも、そこも楽しくて。実験計画を立てる。それで、うまいこと実験計画を立てると、これがわかる、つてというのが職人技みたいなのがあつて。これとこれを比べたらここがわかる、つていうのはうまいこと実験計画を立てないと、いっぱい解釈の余地が出てきてしまうので、そこをつぶすように頑張つて実験計画を立てる、研究をするつていうのは多いですね。

Q. その小さなところを証明したりするのときに、失敗したりはするのですか？

します。めっちゃ言われたりします。こういう違う解釈もありえるよね、とか。

Q. 今、先生が証明しようとしてる」

とは、どのようなのですか？

文化の話とは外れてしまふんですが、もともと後悔と意思決定の研究がメインで、それに文化が与える影響とこのをやつてきていて。regret(リグレット)つて振り返つてああしなればよかったつていうような感情なんですけれども、それが意思決定に与える影響とこのをやつてきていたんです。それで、その後悔を測定するカードゲーム課題つてこのを作り、情報操作をしました。ちなみに後悔させる方が学習は進みます。ポイントが高くなる。期待値が違ふんですよ。期待値が高い方を選び続けていたらポイントが高くなるんだけど、期待値の高い山を選びやすくなる。情報量を統制しておいて、ちっちゃいところだけを変える。そういう情報量操作。もし情報量が違つていたら、情報量が多いから成績がよくなるんじゃないかと

いう解釈も可能ですよね。それって後悔とかのコントロール間の効果じゃないよね、という解釈が成り立ってしまう。

Q. 実験は大変ですね。違う解釈が生まれないように、ちゃんと詰めて考えていかなければならないことですよね。

実験屋さんの楽しいところでもあり、苦しいところでもあります。

Q. 心理は結構、理系が強いて言いますよね。計算とかもいる、みたいな。

統計は心理で全然要るので。

Q. 今、統計学を履修しているんですよ。ひいひい言いながら解いています。

心理の行動系の統計担当は、有賀先生なんですけど、みんな死んだ魚のような目をしているって言う(笑)。頑張ってください。

Q. 統計を使うと規則性が見えてきたりするってことですか？

これは心理学が実験を行っていることに由来しているんですけど、例えば大学生30人とかのデータから人間一般とは、みたいな話をしなくてはならないんですよ、心理学って。その30人しかデータをとってないので、偶然その結果が得られたかもしれないじゃん、つてなるじゃないですか。でも偶然これが起こる確率つてめちゃくちゃ低いよつていうのを言いたい。そうすると偶然じゃなくて、たぶん本当に性質があるんだろう、みたいな言い方ができる。それでその30人とかのサンプルから一般化するというときにどうしても統計というのが必要になつてくる…つていう話を統計の授業でやっているとと思う(笑)。

Q. 学生時代に研究以外で、印象に残つ

ていることを教えてください。

学部生の時はずつと、フェンシング部だったんですよ。体育会の。フェンシングをやっていて結構それに明け暮れていた感があるかも(笑)。

Q. どうしてフェンシングをやるんですか？

なんででしょうね。高校まではオーケストラをやっていたんですよ。中高が一貫で。クラリネットやっていたんですけど、燃え尽きたからいいやと思つて、何やるうかなと思つたときに、運動の部とかやってみようかなと思つて。そのとき、大学から始めても勝てるよつて当時のフェンシング部の先輩が言っていて。なぜならマイナーなスポーツだから(笑)つていうので、じゃあやってみるかと思ひ、入りました。

Q. 勝てるようになりましたか？

ならなかった。それでも結局、最後までやっていたかな。

Q.最後に、総科生に一言お願いします。

とにかく学部生の間は色々な経験をしてほしいです。勉強に限らず、旅行や読書など今できることをしっかりとやって、吸収してほしいです。大学生を楽しんで。

Q.「これをやっつけ！」というおススメはありますか？

旅行かな。旅行って色々考えますよね。計画たてることもだし、無計画で行ったときに、トラブルにどう対処するかもです。予定を立てるというスキルも、予定通りにいかなかったときの対処のスキルも身に付きますよね。あと、国内外問わず色々なところに行ったら色々なものがみえてきます。大学院の一年生のときに海外に行った

のですが、サバイバル能力がつかました(笑)。会社に入るとなかなかできないから、今のうちにぜひ。

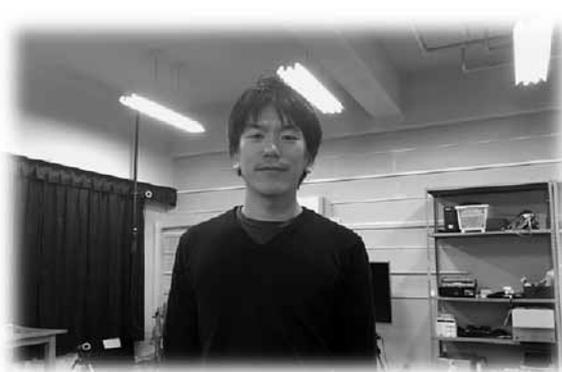
Q.外国語ってできないといけないのでしょうか……

わからないよね(笑)。Google 翻訳とかの性能もあがっているし、みんなが卒業するときにはもう外国語能力はいらないかもね。できた方がいいに越したことはないけど、AIとかに希望を託してもいいかも(笑)。外国語は行ってしまったら話すもので、文法とかよりも通じればいいんです。外国語も必要なときにできればいいのではないのかな。こんなこと言ったら怒られるかな。

インタビュー担当

立花紗希、鈴木香苗

進矢 正宏 先生



研究分野：
スポーツバイオメカニクス、姿勢制御、運動の自動計測システム

Q.どのような研究をされていますか？

どのような研究をしているかなんですけど、人が実際どういう運動をし

ているのかっていうのと、その運動を脳が作り出しているわけなんですけど、どうやってるんですかっていうのがメインです。けど、けっこう適当に楽しそうなことに手を出しています（笑）。

運動制御の問題をやる時に、ロボットを作ることを想像してもらったらいいんですけど、ロボット工学やりますっていう人って、めっちゃ幅広くて、センサーやってる人もいるし、モーターやってる人もいるし、制御システムやってる人もいるし、いろいろいる。それと同じで人の運動を理解したいですって言った場合、その興味はけっこう広くて、何が専門ですかって言われた時にちょっと困るところがあります。でも、人の運動が好きなのは間違いない。

広大的には、私は総科のスポーツ科学の中にあるバイオメカニクスの先

生なので、バイオメカニクスですって言った方がいいのかな（笑）。研究内容は、そんなかんじで人の運動全般ですね。

Q. 研究の魅力は？

研究の魅力：難しいですね。だって「面白くない？」ってかんじだから：自分が面白いと思つたことをやって、他の人にも面白いと思つてもらえたら、お金がもらえるような世界なので、自分の研究分野の魅力って言われたら難しいですね。あんまり考えたことないです。

Q. 研究を始めたきっかけは？

研究を始めたきっかけ：人が動くのって不思議じゃないですか？不思議に思つたから知りたくなつたっていう。

Q.それは学生の時ですか？

うん、たぶん昔から。私は、京大の総合人間学部出身なんです。それで、人全般やります、みたいな感じで興味を持って入っているんですけど…。大学の時の部活は少林寺拳法だったんですけど、すごい上手い人には動きを読まれるんですよ。それって不思議じゃないですか。俺は向こうのことがわからないのに、向こうはこっちのことがわかるっておかしくない？ 論理的に考えて仮説は2つに分かれて、こっちは向こうに動きがばれる情報を提示しているからっていう考え方と、提示されている情報は一緒なんだけど、そこから相手の動きを見破るっていう意味のある情報を抽出する能力が向こうの方が高いっていうのと、どっちかなわけなんです。それでちよつと勉強すると、意図的に動く前には姿勢制御として無意識的な運動が人の

意図的な運動に先行するという研究があつたりするんです…とかなんとかで、姿勢制御の研究に入っていくっていうのがそれっぽいストーリーです。

それで、バイオメカニクス、運動メカニクスとかをなんでやるようになったかって言ったら、たまたま近くに楽しそうな研究をやっていた先生がいたから、という感じですね。

Q.そう考えると、総科の生徒は入学してから専門を選べるという点においてはいいかもしれないですね。

それは結構微妙で、教員の人数は、ちよつと総科は多いけど他とそんなに変わらないわけですよ。だから、研究分野を図形的に、幾何学的に考えてみて、総科はすごく広い所に百人だけ立っているわけですね。それとすごく狭いところに百人立っているという

ことの違いなので…。例えばですね、スポーツ科学のバイオメカニクスの話なんですけれども、実際のスポーツ競技の場面の測定とか、自由に動き回るような状況下でバーチャルリアリティや眼球運動測定を組み合わせてやるっていう人たちもいるわけです。だけど、少なくとも総科の人たちはそれに触れることはできないんですよ。おそらく学生だとそういう分野が存在することさえ知らずに卒業していくわけです。ところが、スポーツ系専門の学部だとできるんですよ。

自分のやりたい研究にドンピシャな先生がいなことがほとんどで、いそうでいないのが普通なんですけれども、自分で動ける人にとってはいい環境だと思いますね。「学生が勝手に動くといいんじゃないですか？」っていうタイプの先生が多い気がするんですけど、総科の場合は。

あとは幅が広がっているけど、「あなた方の勉強する時間が増えているのですか？」という、そういう問題もありますよね。

私は総合人間学部(京都大学)、総合文化研究科(東京大学)、総合科学部(広島大学)にしか所属したことないのでこういうところしか知らないんですよ。だから何とも言えないんですけども、基本的には好きですよ。

Q. 研究者になっただきっかけは？

研究者になっただきっかけ…わからないですね。日々を過ごしていたら、こんなことをしていたっていう。例えば、大学院に進む人が、修士をでて民間に就職するか、アカデミアを目指すかっていう選択になったときって、人生の幸せは何かとか、何を目的にして生きるかとかみたいなのを考えるわけなんですけど、研究者になるって

うのはお金を捨てるっていうのに現実的な意味ではかなり強いんですよ。まあ、少なくとも私の感覚としては。お金は儲からなくていいからアカデミアに行きたいっていうのは、そういうような気分になったわけなんですけど。それはもし、すっごく儲かったら何したいかみたいなのを考えたとき、なんかこう、若い人と知的な会話とかしたいなと思って。でもそれって大学の教員になったら普通の仕事としてできることなわけよ。若い人としやべるとか、好きな研究するとか。じゃあそれをやるために、お金を稼がなくてもいいじゃない。

Q. 総科のいいところは？

総科のいいところは、まあ、イメージングな先生が多いところ。イメージングな先生が多いところ。これは、私が大学を出てカナダで働いた時期に知

った単語なんですけど、良い単語だなーと思って(笑)。意味は想像つくでしょう。つまり、縛らない、「好き勝手やったらいいんじゃない？」っていう。その、イメージングな雰囲気とか、そういう先生が多いんじゃないかなって想像しています。四月から来たので、まだそんなにわからないんですけど、総合系って想像するとそんな感じで、良いんじゃないかなと思ってます。

Q. カナダの時のお話をもう少し聞けますか？海外で働いて苦労したことは？

苦労したこと？そんなにないな…

Q. 言語とか大丈夫だったのですか？

確実に向こうで一番英語が下手だったのは私なんだけど。一部の完全な帰国子女を除いて、決して日本基準で

は全然下手じゃないんだけど、向こう行ったら違うわけなので、まあ英語が出来るっていう感覚はないんですけど、ただ英語への苦手意識もないですね。

あとは、リスペクトされると下手な英語も聞いてくれるんです。日本語の日常会話でも、この人はいいい人だから話をしようって思いますよね。仕事とか研究とかの話で言うと、賢い人のことは言葉足らずでも聞くんですよ。ちゃんと論文を書いて出していて、賢かったら、聞いてくれるので仕事をする上ではそんなに困らない。正直、結婚してから行ったので友達がいなくてかいう感覚もなかったし、住むところもボスの友達の家の地下をすごく安く貸してもらったから、家探しとかも全くしてない。毎日夕方の四時から五時ぐらいには仕事が終わるような田舎だったので、ゆるい研究環境だった

んです。苦労したことは、冬に寒かったことくらい(笑)。

ただ、リスペクトされなきゃいけないっていうのはある。まあ、英語は大それたんですけど、数学とかプログラミングってというのは言語を超えた言語なので、この辺ができたから尊敬してもらえました。

仕事的には日本と何にも変わらない。ただ、研究環境では日本は圧倒的に負けているというか、全然違うのでそれは知っておいたほうがいいと思います。学生の皆さんはどういう状況下で自分が戦っているのか、どういう相手と戦っているのかっていうことを。研究系に行く人も、行かない人でも、ジョブマーケットでの競争相手は世界中にいるわけなんだけど相手はどういう教育を受けてきていて、どういう環境で学んでいるか、知っていますか？全部を知らなくてもいいと思

うんだけど、視野を広げてみるといいと思いますね。相手はもしかしたら自分が全然想像できないような環境で、学んでいる可能性があるわけで、それは知っておいたほうがいい。

Q. 趣味はなんですか？

学生には申し訳ないけど、学生と話すことです。あとは旅行、おいしいものを食べることに、スポーツなどです。大体仕事ですね(笑)。学会に行つて、学生指導して、スポーツの研究をして・・・だからこの仕事は気に入っています。

Q. 先生が授業で「大人になったらお金を払わないと会えないのに、なぜ学生は食堂とかにいる教授に話しかけないんだ」とおっしゃったと聞いたことがあります。

本当にそうですよ！会社の人を教

授の話を聞きたいと思ったら、お金を払って聞くことになります。でも学生はかわいがってもらえるので、がんばらん出て行ったら、話を聞けます。忙しいときは断られますが、それは本当に忙しいだけなので気にしなくていいんです。意識高い系学生として活動していた私が言うのだから間違いないです(笑)。身分をフルに利用してください。

Q. 先生の学生時代は？

意識高い系(笑)。それと部活くらいですね。何をもって「遊んでいた」なのかわかりませんが、個人的には今も授業などで遊んでいるっていう感じだから、そんなに変わってないです(笑)。研究で勝とうとしたら、遊んでやるぐらいの感覚でないと大抵勝てません。世界は広いですからね。自分が仕事としていることを本当に遊び

のように好きな人がライバルになるわけで、そうすると嫌々やってたんでは勝てないんです。

もちろん飲み会とかはたくさん：京大って下宿生が多く、一人暮らしの人が多いし、終電がなくみんな家が近いので、部活終わった後の十一時とかでも呼び出されたり。

Q. 少林寺拳法はいつから始めたんですか？

大学から。高校の時に空手をやっていて、一通り打撃格闘技のサークルと見ていたんだけど、少林寺の人たちが一番数が多くて楽しそうだったんですよ。けどどまじめな少林寺拳法部の学生じゃなかったしな：本気で部活をやっていた人たちに怒られそう。国際交流サークル行ったりとか、いろいろ適当に動いてたので、あんまりまじめじゃなかったと思います。いろん

なところにフルコミットメントしないで、楽しく生きていたと思います。

ああ、その時の友達は今も関係が続いているので、みなさんは、そういう仲間というか、友達を作っておくといいと思います。

Q. 学生の頃のつながりって今でもあるんですか？遊びや仕事で。

研究職ではあまりないです。仕事関係なく話せる人が社会人になると減ってくるので、そういう意味で楽しいかもしれないですね。ただ、昔の友達に会うっていうのはですね、結構大変でして、日々を一生懸命生きていてちゃんと活動している人しか同窓会に参加できないんですよ。気持的に。わかります？だから切磋琢磨っていうやつですよ。同窓会に参加できる自分でい続けることっていうのは、なかなかいいモチベーションになりま

す。

多分よその学部よりいろんな業界にいたので、それはいいと思います。大学の教員もいるし、メーカーもいるし、公務員、官僚。JICAの友達がイラク事務所をたち上げたり。あとは、石垣島で魚の絵を描いているアーティストとか。同窓会が楽しくなると思いますがよ、総科だと。ぜひ、同窓会にいろいろな自分を維持してください(笑)。

インタビュアー担当

29 生 原ゆうみ、横山 駆

材木 和雄 先生



研究分野：
現代日本社会、欧州の地域研究

Q. 専門の研究テーマ、内容について教えてください。

専門は、現代社会学と地域研究の2本柱です。現代社会学については、近年では少子高齢化社会の諸問題について、地域研究では、最近では旧ユー

gosラビアの民族問題について研究をしています。二十年前は、中国の金融調査などをしていました。また社会

調査演習の授業は、社会調査士認定プログラムができてから三度目の担当になるんですけど、これまで、最近の結婚に関する問題や高齢化社会の問題についてのテーマで調査を行いました。三度目の今回は、元気な高齢者に焦点を当てています。認知症患者や要介護者が増加する中で、元気な高齢者もたくさんいます。元気な高齢者とはどんな人か、高齢者の元気とはどんなものか、元気な高齢者はなぜ元気なのかなど高齢化問題のポジティブな面を調査したいかと考えていますね。また地域研究の民族問題については、旧ユーgosラビアでの内戦は二十年以上前に終了しているにもかかわらず、まだ統合はされておらず、昔のよ

現地調査を通じて、現在の様子や今後どうなるかを研究しています。

Q. 研究のきっかけはなんですか？

元は産業社会学が専門で、社会の側面から経済や産業について考えるというのが基本的な研究のスタンスだったんですね。大学院の頃は、高度経済成長に伴って地域の産業や職業構造がどのように変化して行くかという研究をしていました。また、農業という産業についても研究していました。農業は産業としては衰退しているけど、兼業農家で労働と農業を兼任しているのが今の日本の農業の中心です。このテーマだと、地域社会と産業労働を同時に研究できました。また当時ユーgosラビアは社会主義国だったのですが、労働者自主管理制度と違って、労働者が経営に携わるといって、独特な企業運営制度でした。そういう

自主管理社会主義という当時の社会主義とは異なるシステムの研究をすることにになり、旧ユーゴスラビアに留学しました。しかしその後民族紛争が起こって、連邦国家自体が崩壊し、民族問題がクローズアップされるようになりました。当初民族問題には関心はなかったけれど、研究対象の国の出来事に衝撃を受けて興味を持つようになりました。

Q. 実際に調査に行つて現地の方々と交流されるのですか？

はい。現地に行つて交流というか話を聞くという感じかな。いろんな民族がいますからね、主にはセルビア人、クロアチア人、ボシュニャク人(ムスリム人ともいう)それぞれの民族のグループに話を聞くということをやっています。こちらの論文は紹介しなかったけれども、ウェブサイトでいくらで

も見れると思います。

Q. 「自身の趣味とかはありますか？」

趣味は、研究のついでにいろんなところに行つていろんなものを見たり食べたりというのがありますし、最近では外国にいた時の友人や知り合いを自分の家に招いて料理を振る舞つたりというのをやっています。

Q. ちなみに今までで一番印象的だった食べ物は何ですか？

ハンガリーのタルタルステーキ。ビールと一緒に食べるとすごく美味しいのね(笑)。

Q. どんな学生時代を過ごしましたか？

学部生の頃は第二オイルショックの時期で就職難だったし暗かった時代かもしれないですね。学部の頃は総

合科学部ではなくて、文学部哲学科社会科専攻でした。やはり自分のやりたい研究ができて楽しかったです。自分もともとやりたかった研究は哲学だったんですけど、やっぱり難しいなと思つてね、だから哲学はパスして、他に、哲学科の中で一番現実的な社会学を選んで勉強することにしました。サークルでは歩いて旅行する会みたいなのを友達と作つて、結構その当時日本のいろんなところを行つて、ユースホテルからユースホテルまでを歩くみたいなことをしました。日本海地域や福島の方、四国なんかも行きました。そうやって歩いてどこかに行くつていうのは、今やつてるフィールド調査にも通じるところがあるので、やつてゐることは今も昔もあまり変わつてないですね(笑)。まあ健康のためにも歩くようにしてますね。足が弱くなつたらフィールド調査できなくなる

から。

Q.総合科学部の学生に一言あればお願いします。

一つ思うことは総合科学部の良さであるキャパシティを存分に味わってほしいなということ。というのは、総合科学部のキャパシティという良さってというのは、いろんな研究分野の先生がいて、いろんな授業を受けることができるよね。でも実際に学生が受ける授業ってというのは、総科にいる先生全体のうちの何割くらいだろうね。それぞれの研究領域にもたくさん先生がいるけれど、半分も履修してないんじゃないのかな・・。残念ながら、全然コンタクト取らない先生とかもたくさんいるから、その点ももったいないかなと思うな。

プログラムのキャパシティを満喫して卒業しているかっていうと、ちょ

っとその辺は疑問ですね。これもやむを得ないと思うんだけどね、非常にごく狭いところですか総合科学部の良さを味わってないんじゃないか、という風な気がします。そういうことで総合科学部に望むことといたら、せっかくのスタッフが揃っていて、メニューがいろんなものがあるわけだから、できるだけやっぱりそれらを食わず嫌いせずにとってほしいなと思いますね。これは単位が取りやすいか、難しいかみたいな判断で、授業を取らなかったりするから。

また私の担当している社会学法論は、総合科学部の学生にとってこの話は聞いてほしいなと思います。将来どうい研究するにあたっても役に立つようにね。別に私の授業取れど言ってるわけではないんだけど、多くの先生方が、総合科学部のプログラムを担っていて、総合科学的な

思考を深めるうえで貢献していると思うのね。せっかくいろんなメニューが並んで、耳学問するだけでも非常に面白いので、いろんな先生の授業に出てみるべきだと思いますよ。

インタビュー担当

生松奈津佳、中山恵里

社会探究領域 社会フィールド授業科目群

フंक・カロリン 先生

(今年新しく創設される国際共創学科長)



研究分野：

観光地理学、ヨーロッパ及び日本の地域開発

Q.フंक先生は主にヨーロッパや瀬戸内海沿岸での観光についての研究をされてると思うんですけど、その具体的な研究内容や現在特に取り組まれていることなど、教えて頂きたいです。

研究内容は年によってテーマが少しずつ変わってくるんですけど今やっているのがクルーズの話ですね。2年前から広島港にも大型クルーズ、つまり3000人から4000人くらいの人に乗るような船が来てますが、そういう船が来るようになって地域にどのような影響を及ぼすのかというのを研究しています。元々広島県から依頼を受けて、船を降りた観光客はどんなことをしたいのかというようなことを知るために始めました。しかし一気にたくさんの方が来ることによってバスの手配等のいろいろな課題も出てきて、こういうクルーズの観光は結局どうすれば地域にいい効果をもたらすような形にできるかというのを考える必要が出てきました。広島だけでなく、いろんな日本国内の港に行ってみてまずはその受け入れ側の聞き取り調査をして、どういう風

にそのクルーズが地域に影響を与えるかと考えて、そして今はドイツ人の研究者と協力してさらに研究を進めています。

そのドイツ人の研究者は建築や都市計画が専門で、ドイツやオランダなどで研究をしている方で、それを比較したいということで共同研究が始まりました。

もともと海の観光に興味を持ったのは、ヨーロッパが海の観光が盛んなのに対して、瀬戸内海はせっかく素晴らしい海とたくさん島があるのにみんななんであまり楽しまないのかという、一、三十年前に日本に来た時の素直な疑問がきっかけで、研究し始めました。

Q.研究をされていてやりがいを感じる瞬間はありますか？

色々ありますが、ひとつは、研究

したことが大学以外の場でも役に立ったときにやりがいを感じます。調べた内容をできるだけ地域に返そうとしていて、どの程度役に立つかわからないんですけど、例えば講演会に呼ばれて講演した後で、「やっとうこういうことが分かった」とか「役に立った」とかそういう反応をいただくと、やりがいを感じます。あとは、いろんな国の留学生がうちのところで研究するので、自分の国以外のところを見て、お互いにそれぞれの事情をシェアして、視野を広げているなあということを実感できるときもやりがいを感じますね。

Q. 学生時代に打ち込んでいたことや好きだったことはありますか？

昔の話ですが(笑)。ふたつあるんですけど、一つは現地巡検です。地理が専門だったので、現地に足を運んで、

巡検に行くというのがすごく大事で、当時あまり行く機会がなかったソ連に巡検で行くことができて、そこで色々な学年の学生と一緒に学べたというのが楽しかったですね。もう一つ、学生自治会はかなり積極的にやりましたね。当時はちょうどチェルノブイリの事故もあって、エネルギーとか原子力発電所をどうするかという議論が盛んな時期でした。だから、エネルギーと地域についての演習がやりたいうという学生たちが集まって計画を作って、このことに関する授業演習をやってくれないかと教員に頼んで、自発的に演習をしました。授業の内容はもう学生だけでやってたんです。

今の学生がやってる、オリキャンのような行事をやったりとかもあつたけど、当時の学生自治会は、今言ったエネルギーとかそういう社会的問題、他にも当時地理学は女性がほとんど

いない分野だったので、地理学はもう少しフェミニズムも反映できないのかというような勉強会をしたりとか、自治会の活動は結構大きかったですね。

Q. これからの抱負を教えてください

これからどちらかというと、これらの4年間はたぶん研究よりも、新しい学科(国際共創学科 IGS)を立ち上げることが重要な仕事だと思っています。日本人と留学生、いろんな背景のある人がいっしょに学べて、かつそこに総科の良さも盛り込んだ学部を作り上げたい、それが一番これからの大きい課題ですね。

インタビュー担当

大西海光、斎藤ひかる